

分割する言葉

—ヨハネ「福音書」9-10章における術語ラレイン [I-2]—

川崎医療福祉大学 共通科目担当

佐々木 寛治

(平成10年11月4日受理)

'Ο λόγος κρινών

—Die Terminologie *λαλεῖν* in der Joh 9-10 [I-2]—

Kanji SASAKI

*Beauftragte mit allgemeinbildenden Fächern,
Kawasaki Universität von Medizinischer Fürsorge
Kuraschiki, 701-0193, Japan
(Received on November 4 1998)*

概 要

イエスに信することは特別の現実性という地盤に根を張っているが、イエスについて理解することはそうではない。イエスの業、しかも奇跡の業を見ることなしに、イエスに信することは決して起こりはしない。信するものたちと信じないものたちに人々を分かつ所以のものは、しかしイエスの業そのものなのではない。そうではなくてそれはイエスの言葉なのである。イエスの言葉を聞くことをもってはじめてイエスに信ずることが生ずるのである。いま見ることと聞くことが分離しうるものとするならこう言うことが許されよう。われわれが奇跡を経験することのうちで恵み与えられる「見ること」は、神の言葉の現在するデュナミスを指し示すのみであるが、このデュナミスをわれわれは「聞くこと」においてすでに、イエスの言葉のうちに聞きとっていたのである。

Resümee

Das Glauben Jesu hat im Boden der REALITÄT ein Wurzel, aber der Verstehen über ihn nicht. Kein Glauben Jesu findet statt, ohne sein Werk, ja sein Wunder, zu SEHEN. Was teilt die Menschen in die Glaubenden und Unglaubenden ab, das ist aber nicht das Werk Jesu als solche, sondern sein Wort selbst. Mit dem HÖHREN des Jesu Wortes erst entsteht unser Glauben Jesu. Insofern das Sehen vom Höhren nun getrennt wäre, dürfte man sagen: Jenes, mit dem wir in unsren Wundererfahrungen gesegnet wird, nur zeigt die präsentische Dynamis der Wort Gottes auf, die wir im Wort Jesu im HÖHREN vernommen gehabt.

第1章 分割 *σχίσμα* 発生の報告

第1節

10章はA「たとえ」(V1-6), B「たとえ解釈」(V7-21), C「光と闇」(V22-39), D「ヨルダン川の向こうへの還帰」(V40-42)と区分できるが、このうちA, Bの全体は、1)たとえの言葉の提示、2)その言葉の意味の開示、3)その言葉がもたらしたコミュニケーション効果の確定という三段階のステップで進んでいく。われわれはその最後の部分から分析を始めることにする。

10:19 これらの言葉の故に、ユダヤ人たちの間にまた分裂が生じた。

10:20 彼らのうちの多くの者は言った,

「彼は悪霊に取りつかれて、気が変になっている。」

なぜ、あなたたちは彼に聞くのか。」

10:21 他の者たちは言った。

「これらの言葉は悪霊に取りつかれた者のものではない。

悪霊に盲人たちの目が開けられようか。」

10.19 *Σχίσμα πάλιν ἐγένετο ἐν τοῖς Ιουδαίοις διὰ τοὺς λόγους τούτους.*

10.20 Ἐλεγον δὲ πολλοὶ ἐξ αὐτῶν,

Δαιμόνιον ἔχει καὶ μαίνεται·

τι αὐτοῦ ἀκούετε;

10.21 ἄλλοι Ἐλεγον,

Ταῦτα τὰ ρῆματα οὐκ ἔστιν δαιμονιζομένου·

μὴ δαιμόνιον δύναται τυφλῶν ὀφθαλμοὺς ἀνοίξαι;

イエスの言葉 *λόγοι* がユダヤ人の間に深刻な分裂 *σχίσμα* を生み出したこと、イエス信従派と敵対派への分裂の基軸はこの言葉を受け入れるか否かという点にあること、イエスの言葉に対する両派の態度決定は言葉評価の背景をなす判断を媒介にしてなされたということ、以上の主旨が説明言語で極めて簡潔に記述されている（わずかこれだけの範囲の中に、「言葉」に関する語句が5回も出現しているが、イエスの語りを感嘆しつつ歓迎している信従派の *Ταῦτα τὰ ρῆματα* という口調に注目せよ——これとの対比で敵対派の口からは「言葉」という意味の単語の使用が避けられている。次節末尾参照）。惹き起こされた対立的な二つの態度決定の内容はそれぞれが単純な形式に則って語られていて、互いに平行している。発話提示語 *λέγω* による導入、イエスの言葉に対する各派の態度ならびにその際の背景判断の提示、という三項形式がそれである。われわれは引用にあたり、この三項の始まりをそれぞれ行の中での高さを指定して上に書き記しておいた。

引用文中最も高い位置に出ている発話提示語 *λέγω* のここでの用法は、その未完了過去

ελεγον を反復するというヨハネ特愛の説明語法であり、われわれはこれを「分裂提示の λέγω」と呼ぶ。次に真ん中の位置にある背景判断について。イエスの語りを聞く者がいわばみずからこのような背景音楽 (BGM) を流しながら、その重ね合わせ効果の中で、聞いているということである。BGM の違いによってイエスの語りはその印象が全く異なるはずである。引用文中最も低い位置にある各派の態度はこの BGM の曲相に媒介されて決定されているのである。

ここで重要なことは二つの BGM の対立の仕方である。これをもう一度取り出してみる。

敵対派 彼は悪霊に取りつかれて、気が変になっている………イエスの人物判断・メシアの概念

信従派 悪霊に盲人たちの目が開けられようか……………イエスの業という出来事。

一方はイエスという人物への不信を奏で、他方はイエスの為す業¹への驚嘆を高調する。われわれの 2 種類の BGM は、イエスの言葉という「図」を、一方はイエスとメシアについての概念を「地」にして「上から」理解するためのものであり、他方はそれを、イエスの業という出来事を「地」にして「下から」理解しようとするためのものであった。つまりイエスの言葉を評価するに当たり、イエスの人物判断を柱にするか、イエスの業への直視を柱にするかの対立なのである。

分裂の内容がこのように規定されていることを見極めた瞬間、読者は直前 9 章の中で発生した全く同型の対立構造を鮮やかに思い出すことになる。癒やされた人を二回目に呼び出した「ユダヤ人」の居丈高な語り出しと呼び出された者の決然とした応答がそれである。

9:24さて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。

「神に栄光を帰しなさい。わたしたちは知っている、あの者が罪人であるということを。

ἡμεῖς οἱδαμεν ὅτι οὗτος ὁ ἀνθρωπος δημαρτωλός ἐστιν」

9:25彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、わたしは知らない。

一つだけわたしは知っている、わたしは盲人であったが今は見えるということを。

Ἐν οἴδα ὅτι τυφλὸς ὡν ἦρη βλέπω.」

「ユダヤ人」は「イエスは罪人である」という人物評価から出発する。呼び出された男は出来している眼前の事実、つまり業により自己が変えられたという事実から出発する。しかも彼は「イエスが誰であるかは二の次だ」とさえ聞こえる言い方をしているのである。

ここで鮮明に打ち出されている、男の〈下から〉の姿勢が極めて鮮烈である²。当然ながら〈上から〉の演繹論ではないが、〈下から〉とは言え純粹な経験論ではもちろんない。男のこの〈下から〉の認識論は10章末尾のイエスの語りそのものの中に貫徹しているのである。

10:37もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。

10:38aしかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。

この言葉を承けてイエスは語られたのである、「わたしの内に父がおられ、わたしが父の内にいることをあなたたちは知るに至り知り続けることになる」(10,38b)と。石打ちでイエスを殺すために一旦は石をその手に擱んだ「ユダヤ人」たちを前にして、その怒りに火を注ぐようにイエスは最後に「父と子の相互内在 Ineinander」を高らかと告知された。もはや許すことは出来ぬと彼らはイエスに飛びかかった、イエスは身を翻して逃げられた。一触即発の激突は覚悟の上の最後通告にも等しい、この一連の言葉の中に「わたしを信じなくても、その業を信じなさい」の発言はあるのである。「ユダヤ人」たちには、イエスの生まれも育ちも「知っている」(=WI)し、メシアがどこから来るかをめぐる聖書の記述も「知っている」のでその窓から世界を「知っている」(=WII)思いがある(それが降下上昇の交錯配列を鮮明に掲げた7章の柱の一本を形成していた。7,15.27. 41-42. 52)。この「知ること」と、イエスの業の力に巻き込まれて父と子の相互内在を「知るに至り知り続ける」(Vgl. 詩編82,5)という「知ること」(=WIII), この WII と WIII とが最高度の対立³に至ったのである。「知ること」というレベルでのこの対立は、古い普遍性と新しい普遍性との交替というこの時点では、イエスの業が力として人間を巻き込み呑み込む事実性と、事実性の根がもはや不自然と化した概念との対立に根差すものであろう。テキストの陰鬱に聳え立っていく対立の影に、マタイ11, 5-6のイエスの晴れやかな声をわれわれも聞くが、この耳底の声が、根のない知識のたんなる連想上の反響でしかな次元を少しでも越えていくことを願うのみである。

イエスの言葉を前にして、一方で神一人間関係についての自己の知を守旧的対抗的に浮かび上がらせつつこれに耳を塞ごうとする者たちと、他方で、イエスの業による新しい自己の生誕を感受しながらこれに聞き入る者たちとの二つの陣営の対立——ヨハネが分裂 *σκίσμα* ということで提示している対立はこれであった。

イエスの言葉のどのような内容が人々を分裂させていくのかの概要は、すでにわれわれは小論『構成』第1章第3節で簡単に確認したし、それに踏まえてすぐ上にも語ってきましたところである。それは要するにイエスが告知された「父と子の一致」に関わることがらであった。この考察を深めるためにも、聞く者たちをそもそも二派に分けるとき、イエスの「言葉」の、一体どのような特性(内容とはある意味で区別されたそれ)がどう働いているのかが問われなければならない。次節ではそれを最初の分裂 *σκίσμα* が発生した現場に窺い求めていこう。

第2節

7:40この言葉を聞いた群衆のうち'Ex τοῦ ὄχλου οὖν ἀκούσαντες τῶν λόγων τούτων

ある者は言った[ελεγον],

「この人は、本当にあの預言者だ」と,

7:41 他の者たちは言った *ἄλλοι ἔλεγον*, 「この人はメシアだ」と
しかしある者たちは言った *οἱ δὲ ἔλεγον*, 「一体ガリラヤからメシアは来るだろうか。

7:42 聖書は言った *εἶπεν* ではないか,
ダビデの子孫から,

またダビデのいた村であるベツレヘムからメシアは来ると

7:43 こうして、イエスの故に群衆の間に分裂が生じた *σχίσμα οὖν ἐγένετο* *ἐν τῷ ὄχλῳ δι' αἰτῶν*。

7:44 その中のある者らはイエスを捕らえようとしたが、だれも彼に手をかけなかった。

10章での *σχίσμα* の場合と同様ここでもまた、イエスの言葉 *λόγοι* が人々の間に分裂 *σχίσμα* を生み出したこと、イエス信従派と敵対派への分裂の基軸はこの言葉を受け入れるか否かという点にあること、これらが説明言語で語られている。「分裂提示の *λέγω*」によって両派の態度が導入されていることも、敵対派がイエスの人物判断・メシア概念を介してイエスの言葉を否定し去ろうとしていることも同様である。しかしここでは信従派は、イエスの言葉を直接に聞き取ることによって一つまりイエスの狭義の業に接したという事実性の根を介することなく—これを理解していることになっているように見える。しかしそのことによっては前節でわれわれが確認した根幹となる事柄、つまり概念とか言葉の世界の旧来の普遍性を〈出来事の事実性〉によって突破するというこのことが、まことに曖昧になってしまうのではないだろうか。そのことによっては信従派の行為はメニューとして眼前にある諸思想のうちの一つを選択したという、たんなる思想運動に堕してしまわないだろうか。

このような難点を根本的に払拭する何かが語られていることを期待して、*σχίσμα* 記述の直前段落に目を移してみよう。以下の引用箇所で、イエスの言葉を導入し説明する語り手ヨハネの語り口に注意を集中してみよう。

7:37 そして終わりの日に、祭りの大いなる日に「*Ἐν δὲ τῇ ἑσκάτῃ ἡμέρᾳ τῇ μεγάλῃ τῆς ἑορτῆς*、
イエスは立ち上がって叫ばれた、言われるには *εἰσῆκει ὁ Ἰησοῦς καὶ ἔκραξεν λέγων*。

「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。

7:38 わたしを信じる者は,

聖書が言ったとおり,

その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」

7:39 イエスは言われたのである,

受けようとしている”靈”について、イエスを信じる人々が。

イエスはまだ栄光を受けておられなかつたので、”靈”がまだ降つていなかつたからである。

.38 *οἱ πιστεῖνων εἰς ἕμεν*,

καθὼς εἶπεν ἡ γραφή,

ποταμοὶ ἐκ τῆς κοιλίας αὐτοῦ ῥεύσουσιν ὑδατος ζῶντος.

7.39 **τοῦτο δὲ εἶπεν**

περὶ τοῦ πνεύματος ὃ ἔμελλον λαμβάνειν οἱ πιστεῦσαντες εἰς αὐτὸν.

οὕπω γαρ ἦν πνεῦμα, ὅτι Ἰησοῦς οὐδέπω ἐδοξάσθη.

冒頭から「終わりの日に」[ἐν] *τῇ ἐσχάτῃ ἡμέρᾳ* と語り出されれば、聞く者は一挙に緊張するはずである。直前6章⁴で終末論的「終わりの日に」が4回も連続して語られていた(6,39. 40. 44. 54)からであり、しかもいざれの場合もこの定型表現はこのままの形で常に文の終わりに出現していたからである(11,24:12,48にある、残り2つの用例も同様)。物語時間の開始に際して述べたごとく、著者が共同歩調をとることを想定している読者は未来終末論を枠組みにして生活している。他方、象徴次元で、6章末はイエスを信ずる者たちの側からのイエス放棄・イエス殺害が発生している(拙論『聞く』第1章第1節)。だから一層、「終わりの日に」と聞けば読者はギクリとする。そしてこの緊張の中に、6章の終末論的なイエスの語りの記憶が一挙に喚起される。その瞬間に「終わりの日に、祭りの大いなる日に」の場面は読者自身の記憶を基点としたパースペクティブのうちに展開する(つまり場面は読者自身の記憶を参照点 reference point とするものとなり、読者自身の分身が onstage 領域に引き上げられる)。そして引用文の第1行、第2行、第3行と段階を追って打ち続くステップは、語られた光景を自分の心の視線で実際に追っていこう(mental scanning を行おう)とする読者に大変な無理を強いるものである。〈セッティング→動作主 agent イエスの語りの外的態様→動作主の語りの中身〉という視野の急激な収縮を矢継ぎ早に要求するからである。読者の自我の分身は物語の中にさらに一層強力に巻き込まれたのである。

他方、第1行の「終わりの日に」は最終行の「栄光」と対応している。最終行はイエスの語りを解説しているだけではない。「終わりの日」「栄光」「靈の降下」という信仰上の枠組み(フレーム、ここではそれがテキスト上でまさに第1行—最終行の枠構造をなしている!)をコミュニケーション成立の共同の地盤として、語り手は読者のうちに喚起し意識化させているのである。さらにそれ以上に語り手は、自分はこの共同性を尊重して語っているのであること(Paul Grice流に言えば協調の原則の遵守)を主張している。これによって読者にとっては上記引用部分全体が、信仰上の共同の枠組みへの(語り手への親近感に根ざす)自分の参与意志を基点にしたパースペクティブとして広がり、これが自分にとって馴染み深い舞台全体(最大スコープ)となったのである。めがねの縁が見えるかのようにして、自分の信仰枠組みの一端を舞台の袖に意識しつつ舞台全体を眺める自分、そしてその舞台の中に立って、「終わりの日」についての語りについての自分の記憶をひもときながら舞台進行の流れに身を委ねる自分。自分がこのように二重化させられていることを意識することによって読者は、いよいよ深く物語に主体的に参加させられたのである。このonstageとoffstageの最大スコープの中に立つ読者の分身は、イエスの語りと語り手の語りとの重ね合わせとなっている直接スコープ(上掲テキスト上、二

つの「イエスを信じる者「たち」という枠で囲まれた部分) の中の「声」に、耳を傾けているのである。

この直接スコープの上端でイエスが語られる「わたしを信じる者」V38a とは何よりも先ずイエスの直弟子であろう。他方で下端で語り手が語る「イエスを信じる人々」V39a β とはヨハネと（そして様々な次元の読者と）同世代の人々であろう。テキストの結構はこれを二つの外枠としている（そのなかに教会の時代的空間的広がりが確保された）。この外枠を舞台上の landmark(認知言語学はゲシュタルト心理学でいう地と図との関係での図、しかも第 2 の図に相当するものをこのように呼ぶ)として、〈その中に〉(つまり上掲テキスト記述面の V38b と V39a β との範囲に)、「言葉・声」が *trajector* (第 1 の図) として〈湧き上がり〉〈流れ出て〉いる様がここに視覚的に提示されている(引用部分を視覚的に眺め渡されたい)。イエスを信じる者たちのこの共同〈の中で〉、二本の発話提示語 *εἰπεν* (真理を報告する用法のアオリリスト形) で導入されたイエスの言葉 (中の聖書の言葉) と語り手の言葉 (中のイエスの言葉) が般々と反響し合っている。この反響効果の中で強調されていることは、信じる者たちとその共同〈の中で〉、聖書の中の神の声がイエスの言葉に乗って、しかもまさにイエスに特徴的であるその愛(「渴いている君よ！」)において、いま語り始めたということである。

ここで語り手の語りは、「生きた水は靈を意味している」という形で、語義の寓喩的解釈を行っているのではない。そもそもうえのイエスの語りは将来起こるだらうことを客体的予報的に記述しているのではなく、イエスはわれに依り頼む者を必ず救うという約束をこの場で結ばれたのである。「受けようとしている靈について περὶ τοῦ πνεύματος ὁ ἔμελλον λαμβάνειν」⁵ V39a β の *μέλλειν*+現在不定法の用法は、辞書が語るように、まさに「神の予定」としての必然を告げるものであり、神の御心としてのこの約束が、イエスの言葉を聞く者たちの〈内でいまここに〉結ばれたのである——イエスの言葉を聞いたというまさにそのことにおいて。

語り・聞き取られたという契約の重い出来事、ここに実現された発話内行為 illocution そのもの、イエスの語り全体のもつこの迫力を強めて読者の心に届けること、これこそ語り手の語り V39a が遂行していることなのである（まるでオースティンが当時の言語学に対して鮮明に発話内行為の力の存在を指し示したように、この語り手は、イエスの言葉が発話内行為の遂行そのものであることを強調しているのである）。

だから語り手は、イエスの言葉を導入するそもそも最初に、*ἐκραξεν* という術語⁶を使用したのであった。「イエスは立ち上がって呼ばれた、言うには εἰστῆκει ὁ Ἰησοῦς καὶ *ἐκραξεν λέγων*」の *ἐκραξεν* に響きわたっている音・声 *φωνή* は、神の大権を与えられた者のその権威を告知しつつ、神の言葉のデュナミスがみずから自由において顕現する音である。「そして言は肉となられてわたしたちのうちに宿られた」1,14というこの意義の全重量の存廻に、この音・声 *φωνή* が聞かれるか否かが関わっているはずである。思うにヨハネにとって、この声を聞くことなくして〈イエスの言葉について über 読み聞く営為〉は、たんなる思想運動に過ぎないとされているに違いない。

ἐκφράξεν という術語をもってイエスの言葉を導入した語り手の語りが告げていることはだから、次の一点なのである。この声 *φωνή* を「わたしたちのうちにわたしは聞いた」と言う者のみが、〈信する〉ということの実的な核を恵まれたのだということ、これである。

そして決定的に重要なことは、〈信する〉ことの出発点に立つこの〈聞くこと〉は神の先行する招きによってのみ可能とされるのだということである。下記引用文で「真理からである者」、「神からである者」とは、それが人間の間のことである場合は、「父が子に与えられる *διδώμενος* 者」、「父が子へと引き寄せられる *έλκυνω* 者」(6,34-46)のことであるに違いない。ロマ8,29にならってこう言うべきである。〈神から〉の声・言葉が聞ける者は、その存在そのものが、前もって神によって、〈神から〉へと転倒されたものに創りなされているのである（そのなかの何かの契機がしるしに巻き込まれること、であろう）。

18:37bγ わたしがそのために生まれ、そのためにこの世に来た、その所以のものは、真理について証しをするためである。真理からである者は皆、聞くわたしの声を。

18:37bγ. ἐγὼ εἰς τοῦτο γεγέννημαι καὶ εἰς τοῦτο ἐλήλυθα εἰς τὸν κόσμον, ἵνα μαρτυρήσω τὴν ἀληθείαν· πᾶς ὁ ων ἐκ τῆς ἀληθείας ἀκούει μου τῆς φωνῆς.

8:43 わたしの言っていることが、なぜ分からぬのか。それは、聞くことができないからだ、わたしの言葉を。

8:43διὰ τὴν λαλιὰν τὴν ἐμὴν οὐ γνῶσκετε; ὅτι οὐ δύνασθε ἀκούειν τὸν λόγον τὸν εμὸν.

8:47 神からである者は神の言葉を聞く。

あなたたちが聞かないのは神からではないからである。

8:47 ὁ ων ἐκ τοῦ θεοῦ τὰ βηματα τοῦ θεοῦ ἀκούει.

διὰ τοῦτο ίμεις οὐκ ἀκούετε, ὅτι ἐκ τοῦ θεοῦ οὐκ ἔστε.

8:23 イエスは彼らに言われた。「あなたたちは下のものからであるが、わたしは上のものからである。

あなたたちはこの世からであるが、わたしはこの世からではない。

8:23 καὶ ἐλεγεν αὐτοῖς, 'Υμεῖς ἐκ τῶν κάτω ἔστε, ἐγὼ ἐκ τῶν ἄνω εἰμι·

ιμεῖς ἐκ τούτου τὸν κόσμον ἔστε, ἐγὼ οὐκ εἰμὶ ἐκ τοῦ κόσμου τούτου.

「終わりの日に、祭りの大いなる日に」、イエスを信じる者の心のうちで、そして彼らの共同の真ん中で(20,19, 26)鳴り響きかつ聞かれて約束を結んだこの音が、群衆を分割したのである⁷。そして読者もこの物語に巻き込まれた度合いの深浅によってあるいはより強くあるいはより弱くこの力を蒙るのである。この意味で上記7,40b, 41a に見られるイエス信従派の態度決定は、——彼らはイエスの言葉の内容に信服したのではあるがそれ以上に——彼らの〈内でいまここに〉イエスにおける権威ある音が鳴り響いたという、前代未聞のフォルティッシモの事実性に依拠していたのである。

神の言葉のデュナミスの、イエスの権威ある音声 *φωνή* における到来。現在終末論としてのこの決定的な事実性こそがイエスの「業」の根底をなすものであると、いまやわれわれは考えるべきである。この権威ある音の事実性が聞き取られ／聞き取られないことによって人々の間に分裂 *σκίσμα* が走ったとき、この音という裁きの大権の活動が現在していることを意識し強調する場合には、われわれはこの *σκίσμα* を「分割 Ur-Teilen」と訳すことにする。

第3節

ところで神の言葉のデュナミスということを考えるとき、10章の分裂場面でイエス信従派は術語 *ρῆμα* を口にしていたことが思い出される（本小論冒頭引用文）。

10:21b これらの言葉は悪霊に取りつかれた者のものではない。

10.21b *Ταῦτα τὰ ρῆματα⁸ οὐκ ἔστιν δαιμονιζομένου*

この語を使用することによって伝えようとされていることはおそらく、彼らが神の言葉のデュナミスそのものをあの場面でのイエスの言葉の「響き *φωνή*」の中に聞き取ったのだ、ということであろう——イエスの言葉の「内容」を積極的に評価するのには「彼らの〈下から〉を表現する」BGM が寄与したのではあるが、しかしそのことを根底から可能にする根拠・しるしが言葉そのものの側に具わっていた訳である。

術語 *ρῆμα*, *λόγος* はヨハネ「福音書」にそれぞれ12回、40回使用されているが、前者の著しい特徴は地上の言葉を評価しようとする志向があるとき、特にその言葉の中にまさに神のデュナミスが孕まれていることを伝えるときには、前者が使用されるということである（こういう「言葉」を話すの「話す」は *λαλεῖν* で提示される傾向がある）。

^{3:34} 神がお遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が“靈”を限りなくお与えになるからである。

^{3:34} δν γὰρ ἀπέστειλεν δ θεὸς τὰ ρῆματα τοῦ θεοῦ λαλεῖ, οὐ γὰρ ἐκ μέτρου διδωσιν τὸ πνεῦμα.

^{6:63} 命を与えるのは“靈”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は靈であり、命である。

^{6:63} τὸ πνεῦμα ἔστιν τὸ ζωοποιῶν, ἡ σάρξ οὐκ ὡφελεῖ οὐδεν τὰ ρῆματα δὲ ἐγὼ λελάληκα ἵμιν πνεῦμα ἔστιν καὶ ζωὴ ἔστιν.

^{6:68} シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。

あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。

6:68 ἀπεκρίθη αἰντῷ Σίμων Πέτρος, Κίριε, πρὸς τίνα ἀπελευσόμεθα;

ῥῆματα ζωῆς αἰωνίου ἔχεις,

14:10 わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。

14:10 οὐ πιστεύεις δτι ἐγὼ ἐν τῷ πατρὶ καὶ ὁ πατὴρ ἐν ἐμοὶ ἐστιν; τὰ ῥῆματα ἂ ἐγὼ λέγω ὑμῖν ἀπ' ἐμαντοῦ οὐ λαλῶ, ὁ δὲ πατὴρ ἐν ἐμοὶ μένων ποιεῖ τὰ ἔργα αὐτοῦ.

父から子へさらに弟子へという言葉の示現の方向を示す用法は両者に共通だが(14:10:17,8 / 14,24:17,14), 霊・永遠の命・父の業が直接結びつく用例は *λόγος* にはないのである(5,24は間接的な結合)。

第2章 悪霊憑き言辞と術語 *λαλεῖν*

第1節

イエスの言葉 *ῥῆμα* の「響き *φωνή*」が具える権威は悪霊の口にふさわしくないとする、上掲10章における信従派の感嘆の辞は、「彼は悪霊に取りつかれて、気が変になっている」という敵対派のイエスに対する人物判断に反対するものであった。ところでそもそも敵対派が、イエスの言葉の迫力に気圧されてか「悪霊!」と口走ったとき、彼らはイエスの大声(第一世代の弟子たちには、パンの裂き方と共に、彼の大声はいかにもイエスと想わせる、特徴的なものであったようである)の「響き *φωνή*」に異様なものを感じたからだということはいまや紛れもない。彼らはそれを権威であるとは聞かなかった、しかし異様さだけは確実に聞き取った。その体験がなぜ悪霊と結びついた(ことにされた)かについては別の議論が必要である。その点は次節で考察する。

ところでうえの敵対派の発言から推して、明らかにヨハネは、「ベルゼブル論争」への何らかの関連を考えている。しかしけわれわれはいまは、——悪霊が自ら語るにせよ悪霊退治の癒いやしを受けた人が再び語り出すにせよ、その発話は動詞 *λαλέω* で提示されることが通例であった(文章第3節末尾参照)——という共通理解を話し手・聞き手の間にヨハネは前提しているという認識を踏まえた上で——議論をテキスト内部に限ることにする⁹。

われわれの物語の流れにおいて読者は、「ユダヤ人」側からイエスに向けて「悪霊憑き」との罵倒が浴びせられるのを耳にするのはこれで三回目となる(それぞれ DM₁, DM₂, DM₃と表示することにする)。

DM₁ (7,14-24), DM₂ (8,31-59) を振り返り、今回の使用箇所 DM₃をこれに加えて三者を重ね合わせてみることで、「悪霊憑き」言辞の使用されるフレームが形をとって現れてくる。7章8章10章という「イエスが上げられる」という方向が強く出されている章の、しかもその特

徵が当該章内でも特別顯著な箇所でこの言辞は出現しているが、その中で、8章のもの、特にその第二例8,52-53、が中心的 centralだと考えられる（拙論『Joh 8,52-53』はここの「死」を焦点にしてテキスト全体のカタバシス・アナバシスの建築術的構造を展望して釈義の準備をなそうとするものであった）。以下この例を中心にして、DM₁をも参照しつつまとめてみる。

統語論的要素としては、V：判断述語、N：判断内容を示す名詞節、S：後文がある。Vは裁判・異端審問の裁決を下すという機能を準備している。Nは「あなたは悪靈に取りつかれている」という一文でできている。Sにおいて話し手は、聞き手が先刻発した言葉をその本人のもとへと〈死〉を背景にして送り返している。それは判決の量刑を示唆している。この全体で構成された悪靈憑き言辞は、話し手が聞き手を「おまえは自覺的意識の下では到底語り得ない神冒瀆（Vgl. 5,18; 10,33）の言葉を発した」として非難弾劾するNの発話内行為の力を二重三重に強めている。

つぎにこの非難弾劾の発話内行為を機能させている基盤をまとめてみれば、それが次の四項で構成されていることがわかる。1]法廷物語のセッティングのもとに(7,24:8,46)被告人弁論の形式で、イエスは、2]自分が父からの言葉を話していることを宣言され(7,17-18:8,38.40.)、他方で彼は、3]「ユダヤ人たち」が自分を殺そうとしていることを弾劾される(7,19:8,37.40. 44.)。そして4]このイエスの弁論に対する審問者「ユダヤ人」側からの反撃として、その口から「悪靈憑き」との罵倒が出ていているのである。ここで最も熱い焦点は、「ユダヤ人」たちの確信の神殿の、重い敷石の下から〈神から〉の言葉が突出して神殿を突き上げようとし、「ユダヤ人」たちがこれを封じ込めようとする、強力な押し合いの構造である。

このようにまとめてみると、この法廷物語には、自分（たち）のために死なれた方の受難の必然性を、この方の讃仰のうちに開示し受け止めようとする、語り手・著者の透徹した視線が走っていることがわかる。イエスは第二項の真理¹⁰を、第三項に見られる極限的な反撃を覚悟して、まさに「公然と」語られた——わたしが語るところが真に理解されればわたしの死は必定である、その死を君たちがもたらすのである、わたしが語るところは君たちの最高の真理に対する最高の攻撃だからである。このイエスの弁論構造は審問者の隠された意図を暴き立て、その図星を突く。「悪靈憑き」とは審問者がこの狼狽の中で吐き出す罵倒の辞なのである。

DM₁では彼らの狼狽ぶり7,20がとりわけ鮮やかに示されている。

DM₂では、「わたしの言葉を守るなら、その人は決して死ぬことはない」と断固として約束する当の本人が惨めな死に方をする事の矛盾（というよりも、彼らから見て、イエスの言葉の晴れがましい力強さとその肉の薄汚い脆弱さとの滑稽な対照）への嘲笑を爆発させることで、審問者はその狼狽を解消しようとしている。

DM₃では第二項、第三項がどのように語られているか、これは拙論『聞く』で詳しく追跡していく。ここではDM₃のDM₁、DM₂との決定的な違いを確認しておくことがぜひとも必要である。DM₃は今までのようイエスの面前で直接イエスにむけて言葉が投げかけられているのではなく、「彼は悪靈に取りつかれて、気が変になっている」と、イエス不在の場に飛び交う怒

号となっている。このようにして二人称から三人称への交替によって示されたイエス不在の場とは、空間的な意味だけのことではありえない。語り手はすでにイエスが時間的な意味で不在となっている位置に立っていた。語り手と同じ位置に敵対者たちが同時代人として、〈自らの位置を告げる発話形式によっても〉立っていることが示されているのである。10章「たとえ解釈」部全体の最後に呼ばれた三回目の「悪霊憑き」の怒号は、——先行するモティーフの流れをフィナーレが高調して立ち上げるようにして——B「たとえ解釈部」のパースペクティブがイエスの死後から振り返ったものであることを改めて鮮明にし、振り返られたイエス運動全体を過去のものとして葬り去ろうとする。その否定圧力は前二回のイエス面前での罵倒の比ではない。

それとともにあの怒号は、前二回の場合に見られた法廷物語の定式を改編して後続のC「光と闇」部へと導入する導管の役割を持っている。

この観点からみたC「光と闇」部の特徴を確認しておこう(第一項に関しては拙論『諸起源』にて考察する)。

四項定式をもつ法廷物語を「光と闇」部へ導入するに際しての最大の変更は、第二項の「子の言葉は〈神から〉である」という真理が「子は父と一体である」、「子と父は互いに内在する」へと、つまり〈神から〉であるものが言葉から存在そのものへと、飛躍した点にある(そしてそれは必然である)。「ユダヤ人」たちには思いも寄らない、許すべからざるこの言辞は「死の覚悟」なしでは語れない。「たとえ解釈」部での5回にわたる「わたしは命を捨てる」という言葉の反復がここ「光と闇」部に巨大な影を投げかけていて、そのことによって第三項の「イエスの死の覚悟」は先行して語られているとみなされる。第四項の「罵倒」が「石打の着手」とエスカレートしたのは当然の成り行きである。

第2節

DM₂、つまり8章の悪霊憑き言辞の定式で第2項(〈神から〉の言葉)に関連する記述は注10に掲載したもの以外にもう一ヵ所ある。

^{8:38}わたしは父のもとで見たことを話している 8.38 ἀ ἐγὼ ἐώρακα παρὰ τῷ πατρὶ [λαλῶ]..

ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている。」

ここに「一人称・単数・現在の *λαλεῖν*」が登場しているが、ここと8,40の二ヵ所で〈神から〉の言葉を含意するイエスの言葉が *λαλεῖν* をもってイエスによって提示されている(もう一種類の発話提示語として *λέγειν* の一人称・単数・現在がイエスの語りとしてイエスによって2回提示されているが、語りのテーマは真理であって、〈神から〉の限定は表だってはついていない)。注目すべきは、イエスは「ユダヤ人」たちに向かって君たちの父は悪魔だ、悪魔は人殺しだ、悪魔は虚偽をその本性から言うなどと、口汚い罵り方をされるが、その悪魔の語りが *λαλεῖν* でイエスによって提示されるのである(8,44に二回)。類似の像(ときには全くの対照像)

を並存させて映し出すヨハネの鏡は、〈神から〉の言葉と悪魔の語りを術語 *λαλεῖν* を公分母にして同じ場所に立ち現わさせているのである。

DM₁の場合、〈神から〉の言葉について。

7:16 イエスは答えて言われた 7.16 ἀπεκρίθη οὖν αὐτοῖς [δ] Ἰησοῦς καὶ εἶπεν,

「わたしの教えは 'H ἐμὴ διδαχὴ,

自分の教えではなく οὐκ ἔστιν ἐμὴ,

わたしをお遣わしになった方のものである ἀλλὰ τοῦ πέμψαντός με.

7:17 もし誰かがこの方の意志を行おうとするならば 7.17 ἕάν τις θέλῃ τὸ θέλημα αὐτοῦ ποιεῖν,,

その人は分かるはずである、この教えについて γνώσεται περὶ τῆς διδαχῆς

それが神からであるのか πότερον εἰ τοῦ θεοῦ ἔστιν,

それともわたしが自分自身から話しているのか ή ἐγώ [απ' ἐμαυτοῦ λαλῶ],

7:18 自分自身から話す者は 7.18 [ο ἀφ' ἐαυτοῦ λαλῶν,

自分の栄光を求める τὴν δόξαν τὴν ιδίαν ζητεῖ.

しかし、自分をお遣わしになった方の栄光を求める者

ο δε ζητῶν τὴν δόξαν τοῦ πέμψαντος αὐτόν

この人は眞実な人であり、その内には不義がない

ἵτος ἀληθῆς ἔστιν καὶ ἀδικία ἐν αὐτῷ οὐκ ἔστιν.

ヨハネ神学の根本特徴は〈自分から〉を〈神から〉へと転倒することである。イエス上昇の道のプログラムがテキスト上に始めて公然と組み込まれた7章冒頭のこの箇所に、この神学の目指す方向線が鮮明に掲げられたのである（5章「イエス項」の冒頭、末尾にもこの構造が明記されていた）。ここにも「一人称・単数・現在の *λαλεῖν*」が出現しているが、上掲 DM₂の場合とは全く逆にマイナス・シンボルとして〈神から〉に対照させられて〈自分から〉となっているのである。そしてヨハネ神学は〈自分から〉を悪霊視、悪魔視する。だからここでの「わたしは自分からラレインする」とは、DM₂の場合の「悪魔はその本性からラレインする」とそのまま重なり合うのであり、あくまでも否定されるべき文脈に入れられるのである。

こうして上記引用部分の構成手続きは明瞭である。1]イエスの存在を全面否定する「悪霊憑き」攻撃の圧力が全体を支配している。2]この圧力に対処するイエス側の方策は、「もし敵側が言うとおりであるならば」というふうに仮定形で一旦攻撃を受け止め、3]次に「もしかしたら自分が自分からラレインするなら、君たちの言うように、わたしの内で悪霊がラレインしているのである。しかしたるの語りは〈神から〉である」という反論の枠組みが準備される。4]この枠組みから必要な構成要素を抜き取り、攻撃を受けた結果としての反論という痕跡を消したうえで、対話をリードする形でこれらを提示する。

悪霊とそのラレインがどのようにしてイエスの語りの中に「わたしはラレインする」という一人称・単数・現在形で入れられたかが明らかとなった。

次のステップは、否定すべき文脈の中に取り込まれたこの「わたしはラレインする」を肯定すべき文脈のなかで再確立することである。そのことによって、「神はこうラレインされた」というふうに伝統的に預言者によって、間接的に地上へ伝達された形式を止揚する（つまり今度は悪霊の語りとしてのラレインではなく、神の語りとしてのラレインという契機が焦点になり、これを主体化・現在化して積極的に継承することによって間接性と過去性はこれを消し去ってしまう）ことである。

このことによっていよいよ、神自身が直接に地上でその現在性において語られる、啓示者の発語スタイル・「わたしは父からの言葉をラレインする」が完成する（術語の形成、完成という言い方をわれわれがするとき、編集史的な観点から著者の作業現場を覗き込み、彼の頭脳に当該術語の概念が出来たという意味ではなく、物語の進展過程を通してその術語が著者と読者との理念的に共通な枠組みとなっていくという、著者読者関係の事柄をわれわれは語っているのである）。考えてみれば現在終末論は、神の言葉の現在性・一人称性をアメーン定式を突破した何らかの明確な発語スタイルとして確立することを、その存立の不可欠の条件としていたはずなのであった。その条件がこのようにして満たされたのである。この発語スタイルは8,25-29において原理

的に完璧に樹立された（この箇所を再読されたい）。

第3節

啓示者の発語スタイルの生誕地である8,25-29について語るべきことは余りにも多い。ただ一点、われわれが拙論『セオーレイン』以来指摘している降下上昇の交錯配列に関して述べておく。この8,25-29はイエスの上昇退去を語るものとして、未来終末論の谷間に蠢くわれわれのためにイエスが降下来臨されたその最深部6,37-40と完全に対応しているのである（その原型が7章内部の降下V25-31上昇V32-36の対応である）[なお上昇部は上へ上へと改行して読めば対応が鮮明に読みとれる]。その意味で8,25-29では現在終末論が確立しているのである。ただし、それは原理的には、という意味のことである。8章のこの上昇の道は、『オデュッセイア』や『アエネイズ』の冥界探訪物語におけると同様、上昇の「予告部」に属するからである（拙論『Joh 8,52-53』参照）。

現在終末論がテキストの物語過程の中で具体的に完成していくのは10章がその第一段階である。

そもそも5章後半から現在終末論→未来終末論（父と子の相等→父の影の如き子の存在）として物語時間が開始したのであるからには、この物語時間は10章で終結する。というのもここでは上の推転過程を逆転した、未来終末論→現在終末論（父からの業をなしつづけて自らの輪郭を浮かび上がらせた子→父と子の一体、父と子の相互内在）が語られているのであるからで

ある。従ってこの一つの長大な物語の終結部で現在終末論は具体的に突出してくる。それが人の子の「声・響き $\phiωνή$ 」が端的に登場することの意味である。このことについては、拙論『聞く』第1章第2節で論ずることにする。

ところで8章の現在終末論の原理的な完成場面で確立された「わたしは父の言葉をラレインする」はなるほど動詞の時制としては、直説法・現在の形式を獲得した。しかしそれはなお「反省的」であり、直接性・現在性を得ていない。これに対し10章前半ではイエスは「君に言葉をラレインする」のではなく、「君に声掛けする $\phiωνεῖν$ 」主体として登場される。ここには「反省」の契機は消え去ってはいるが、しかし逆に、物語過程に媒介される以前の直接性に単純に回帰しただけのように見える（10章のイエスの $\phiωνεῖν$ の $\phiωνή$ は、5,25-29の神の子・人の子の $\phiωνή$ なのである。テキストは5章を過ぎると10章に入るまで決して $\phiωνή$ を使用しない）。しかし「たとえ解釈部」は「たとえ部」で鳴った音 $\phiωνή$ を、〈一瞬鳴って消えた音を聞き返す〉ようにして〈解釈する〉のである。明らかにパラクレーツの反省的想起の次元が立ち現れているのである。最高の直接性・現在性は我・汝関係の下に「臨在の $\lambda\alphaλεῖν$ 」において実現する（後述）。

イエス公的活動の終結部12章では $\lambda\alphaλεῖν$ に $\phiωνή$ の直接性を回収することが目指されている（「天からの声」）。そして12,48の「終わりの日に」は未来終末論的生活世界への降下としての6章での用例とは異なり、現在終末論に回収されているのである¹¹。12,44-50に8,25-29と同様な $\lambda\alphaλεῖν$ 記述があるが、現在終末論の完成度における位相差が読みとられなければならないのである。

以下でわれわれは、術語 $\lambda\alphaλέω$ は「誰が $\lambda\alphaλεῖν$ する」のかという観点からその使用状況を概観する。ヨハネ「福音書」においては、「イエスが $\lambda\alphaλεῖν$ する」について各章を追って通覧した後、主要な型の用法が主に何處で出現するかを指摘しておいた。共観福音書においては「イエスがたとえで $\lambda\alphaλεῖν$ する」（10章冒頭のイエスのたとえが何を $\lambda\alphaλεῖν$ するものかわからなかったという、聞き手の反応との関連で）、「弟子が $\lambda\alphaλεῖν$ する」（9章弟子論における $\lambda\alphaλεῖν$ との関連で）、ならびに「悪霊が $\lambda\alphaλεῖν$ する」（一人称単数現在の $\lambda\alphaλεῖν$ の形成過程との関連で）がどのような頻度で出現しているかを確認した。

ヨハネ「福音書」における術語 $\lambda\alphaλέω$ の各章分布

章	1	3	4	6	7	8	9	10	12	14	15	16	17	18	19	
総数	1	3	3	1	5	11	3	1	8	3	3	10	2	4	1	59
J	-	1	3	1	3	9	1	1	6	3	3	8	2	4	1	46
JJ	-	-	1	1	1	6	1	-	5	3	3	6	1	4	-	32
JJP	-	-	-	-	1	4	-	-	2	1	-	-	1	-	-	7

J：発話主体イエス JJ：Jのうち提示者イエス（イエスの自己言及） JJP：JJのうち直説法現在

1) ヨハネ「福音書」では「語る」という意味の言葉が $εἰπον$ が132回、 $λέγω$ が102回、 $λαλέω$ が59回使用され

ている¹²。その中で $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ については、イエスが「わたしは語る $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 」「わたしが語ったと $\lambda\alpha\lambda\eta\sigma\alpha$, $\lambda\varepsilon\lambda\alpha\lambda\eta\kappa\alpha$ 」と話されたというもの、つまりイエスの自己言及の型が32回、著者あるいは他の登場人物が「イエスは語られている $\lambda\alpha\lambda\epsilon\hat{\iota}$ 」「イエスは語られたと $\lambda\alpha\lambda\epsilon\iota$, $\varepsilon\lambda\alpha\lambda\eta\sigma\epsilon\nu$ 」とイエスの語りを提示する型が14回、こうして全59回のうち実に46回がイエスの語りを提示するために使用されている。

- 2) 物語がイエスのカタバシスからアナバシスに大きく転換する7-8-9章（「イエスを宣教する者の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\hat{\iota}\nu$ 」、「イエスを宣教する者が提示するイエスの $\lambda\alpha\lambda\epsilon\hat{\iota}\nu$ 」の成立。「一人称単数現在の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\hat{\iota}\nu$ 」の成立、イエスの言葉は父からの言葉であることの明示）、「上げられなければならない人の子」が主要テーマとなる12章（地上のイエスの「一人称単数現在の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\hat{\iota}\nu$ 」と「天からの声」とが出逢う局面）、告別説教およびいわゆる大祭司の祈りである14-17章（「総括の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\hat{\iota}\nu$ 」が中心）、この三ヵ所には $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 集中して出現している。
- 3) ヨハネ「福音書」ではイエスの言葉の活きは命を与える言葉であるか裁く言葉である。18-19章ではこの後者の側面がヨハネ的に転倒されていて、裁きを受ける立場に立たされたイエスが語った（語る）言葉についてこれが $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ で提示されている（「法廷の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\hat{\iota}\nu$ 」）。
- 4) ヨハネ「福音書」の中の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\hat{\iota}\nu$ の用法で最高のものは二回の「臨在の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\hat{\iota}\nu$ 」（4,26:9,37）であり、両者はその反響としての「理解不可能の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\hat{\iota}\nu$ 」によって profile されている。

なお7章、8章、12章のラレイン記述は、その〈自分から〉の否定ということを核にした申命記の記述に圧倒的な影響を受けているのであり、申命記18,18-22と上記記述箇所の対応関係については『Joh 8,52-53』85-86を参照されたい。

共観福音書における $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ の使用（発話主体の区別とその頻度）との対比

発話主体	A	B	C	D
マタイ 26	12(7)	5(4)	3	6(人2, 母兄弟2, ファリサイ派1, 父の靈1)
マルコ 21	10(3)	6(3)	2	3(聖靈1, 人1, 惡靈1)
ルカ 31	10(2)	3(3)	2	16(聖靈1, 天使3, ザカリア3, 靈に満ちた人・預言者3, 羊飼いたち2, 人1)
ヨハネ 59	46(3)	4(2)	0	9(惡魔2, パラクレートス2, 神1, イザヤ1, 天使1, 地からの者1, 自分勝手に語る者1)

A:イエス(うちたとえ), B:イエスを信じる人(うち弟子), C:(惡靈に憑かれて)口の利けなかった人, D:その他

補論 「イエスを逮捕せよ」との最初の発令

ヨハネ「福音書」で $o\chi i\sigma\mu\alpha$ が語られるとき、それは直前場面でのイエスの語り「をめぐって」惹き起こされたのだと報告されている。イエスの言語行為の「分割する力」に注目すると、7章の冒頭から続いている特徴的な物語展開を見落すことは出来ない。そこでは、特定場面でのイエスの語りがではなく、いくつもの場面の連なりが、民衆を（イエス信従派と敵対派とに）分割する過程として語られ、ついに事態を黙過しえなくなったサンヘドリンがイエス逮捕の最初の行動を開始

《「第1組鏡像体」》

右手（降下）

左手（上昇）

725 そこで言った、エルサレムの人々の中のある人たちが。
 「この人は、殺すことを~~彼~~がやっている者ではないか。」
 26 しかし見よ公然と~~彼~~は語っている。しかし何も彼に彼らは言わない。

本当に認めたのではないだろうか、議員たちは、
 この人がキリストだということを。

27 しかし、わたしたちは知っている、この人がどこから来たかを
 しかキリストが来るとき誰も知らない、彼がどこから来るかを

28 そこで叫んだ、神殿の境内で教えていたイエスは、そして言うには
 「わたしをあなたたちは知っており、また、知っている、わたしが
 どこから来たかを。しかしわたし自身からわたしは来たのではなく、

わたしを遣わした方は眞実である、その方をあなたたちは知らない。

29 わたしは知っているその方を。

わたしはその方から来た、そしてその方がわたしを遣わしたから。」

30 そこでイエスを捕らえることを~~彼~~は求めた、
 しかしだれもかけなかつた、彼に手を。
 まだ来ていなかつたから、イエスの時は。

31 a しかし、群衆の中の多くの者が
 b イエスを信じた、そして言った。
 c 「キリストは、来たとしても
 より多くのしるしをしないだろう、この人がしたよりも。」

わたしのいるところに、あなたたちは来ることができない。』
 『わたしをあなたたちは求める、しかし見つけはしない。
 26 彼が言ったこの言葉は何なのか、

ユダヤ人のところへ行ってギリシア人に教えるなどと、
 こうするつもりではないだろうか、ギリシア人の間に離散している

わたしたちが彼を見つけることはないとは。
 「どこにこの人はへ行くつもりだろう、
 そこで言った、ユダヤ人たちが互いに。

わたしを遣わした方のところに、あなたたちは来ることができない。」
 『わたしをあなたたちは求める、しかし見つけはしない。

そしてわたしは行く、わたしを遣わした方のところに。
 「今しばらく、あなたたちと共にわたしはいる。
 33 そこで言った、イエスは。

イエスを捕らえるために。
 祭司長たちとファリサイ派の人々は、下役たちを、
 そして遣わした、

c' イエスについてこのようなことを。
 b' ささやいているのを
 a' 群衆が
 24 聞いた、ファリサイ派の人々は、

〈ヨハネ「福音書」の最高課題〉

a [] c'

b λόγος b' Kreuz-Chiasmus

c [] a'

求める(探し) σύντιμος

λαλέω λόγος

「左手」

.....
 ↗
 上方へ改行

〈右手〉：「この人がキリストだ」=メシアがここに降下到來されている、その〈左手〉：「上昇退去」の「ヨハネ的誤解」

するに至った7,32というものである。

7章は3幕構成である。第2幕は仮庵祭へ上がられたイエスが三つの説教をされ、これに対して神殿境内の群衆が歓迎・敵対の反応をしめし、ついに群衆が二つの翼へと分裂するに至る。

群衆の反応がV12-13(A). V25-27(B'). V30-32(B). V35-36(B''). V40-44(C)という次第（太い線としてA→B→C）を追ってその亀裂を拡大していく様をわれわれは既に確認した¹³。「群衆」がイエスについて「ささやく」にしても、「良い人だ」（V12）というものである間はサンヘドリンは許すことができていた。しかしV31の内容に至るともはやイエスを放置しておけないのである。V31を挟んでV32の「イエスを捕らえる」とV30の「イエスを捕らえる」とはいまや決定的に次元を異にするものとなった。群衆の間に亀裂が現実に発生したからには、「イエスを捕らえる」ということは（模索・警告という段階は既に過ぎて）現実に執行されなければならないものとなった。イエス捕縛を目指し神殿へと「下役たち」が急派される。テキストのこの場面にヨハネは十字架交錯配列を明確に打ち立て、イエスの十字架上の死を象徴的にここに記しつけている。

われわれの言うところの〈第1鏡像体〉¹⁴【修訂版】を前ページに掲げた。下方の細い矢印をUの字に辿った上で、aとa', cとc'を結ぶ線をXの字に交錯させてみられたい。

どうであろうか。イエスはこの表全体の右手〔向かって左の欄〕上方から降ってこられ、この交錯したX、つまり十字架上で殺されUの字を辿って左手上方に去っていかれているのである。去り行かれるイエスの背後に向かってユダヤ人たちが投げかけた問い合わせ、この中に含まれる深くて重いものが掏出されて左手第3行に強烈に書き記されている。彼が言ったこの言葉は何なのか。

他方右手上方から近づかれるイエスの言葉の権威を前に、「この方は降下到來されたメシアではないか」と、慶びに目を見張って思わず迸り出る歓迎の問い合わせが、右手第3行に生き生きと掲げられている。見よ、公然と彼は語っている。この二つの問い合わせが左右に並べられている。しかもその上の行には、ヨハネ「福音書」最大の課題、「捜す」（求める）が左右に張り渡されている。

この人は、殺すことを彼らが求めている者ではないか わたしをあなたたちは求める、しかし見つけはしない

「見よ、公然と彼は語っている」

「彼が言ったこの言葉は何なのか」

ιδε παρρησία [λαλεῖ];

τις ἐστιν [ὁ λόγος οὗτος δν εἰπεν;

前ページの表の最下段の十字架を意識しつつ上二行にあるこの囲い込みの部分を読む者に、ヨハネ「福音書」の根本メッセージが強烈に伝わってくる。まことに劇的なレトリックである。そしてわれわれの探求課題は[λαλεῖ]が[ὁ λόγος]と結びついて、術語としてどのように形成されたかである。

¹ 「盲人たち」と複数形になっているのは、一部論者が言うように判断的一般的な妥当が主張されているのではなく、9章の奇跡物語が、教会論の論述として、同類のものの代表事例であることによっているとわれわれは考える。

² 〈下から〉とは言っても、もちろん3,31の上と地の「地」、6,63の靈と肉の「肉」、8,23の下と上の「下」を指しているわけではない。

- ³ 宮田光雄氏のマルコ6,1-6の解釈とその展開に多くのものを教わった。『福音と世界』1998年9号所収 同氏著『イエスとナザレの村人との失敗した出会い 出来事として聖書を読むということ』
- ⁶ 6章では2回目の供食物語の中で聖餐制定が語られていたのであり、日暮れから始まる第6日(金曜日)の夜が、象徴次元で、6章に当てられているとすれば金曜の昼間は7章となる。なお、祭りの終わりの日とは追加の8日目ではなく、——イエスの言葉の中の〈水〉が関連する灌水儀式が特別盛大に7回行われる——7日目に違いない(7は最後 $\delta\sigmaκατος$ を表す数字である)。その場合には、象徴次元で、八日目の復活・洗礼の光が8章の世の光に対応させられているのに応じて、陰府下りの土曜第7日が7章となる。7章にはわれわれが「第1鏡像体」と呼ぶ、イエスの降下來臨と上昇退去を表現する鮮明な交錯配列が記述されているのである(本小論末尾に修訂版を補論として再掲)。
- ⁵ 「受ける *λαμβάνειν*」を認知言語学的に分析するために、ある研究に沿って、agent: イエス, patient: 靈, source: イエス, recipient: イエスを信じる者たち, とおいたとして, instrument の系列をどのようにとつていくかによって、「受ける」というここでの内容に何かヒントとなるものが与えられるのかも知れない。
- ⁶ 術語 *κράζω* はイエスの決定的に重大な言葉を導入するためにこと, 7,28: 12,44, ならびに預言者ヨハネの証の言葉を導入するとき(おそらく「わたしは荒れ野で叫ぶ声である」1,23を意識して) 1,15でのみ使用されている。強く「音」を意識させる効果を目指すものとして他に、「公然と *παρησίᾳ*」が、とくに *λαλεῖν* と結合した用法7,13.26: 16,25.29: 18,20が、重要である。
- ⁷ この事態が最も壮大に出来ているのがイエス公的生活のフィナーレとなる12章での「天からの声」12,28をめぐるものである。A. Hammes の *Ruf* もこの箇所に鋭く着目しているが9-10章分析を欠いている。
- ⁸ 言葉が醸し出す威容への感嘆だから、新共同訳のようにではなく、〈これらの言葉は!〉というふうに結合したものと解すべきである。その読み方は8,20の場合と対応することになる。

8,20 *Ταῦτα τὰ βῆματα ἐλάλεσεν.*

10,21 *Ταῦτα τὰ βῆματα οὐκ ἔστιν δαιμονιζομένου.*

小論『諸起源』でも論ずるが、*δαιμόνιον* と *λαλεῖν* とは密接な関係がある(この事実を読者が了解していることをヨハネの語りはコミュニケーションの共通基盤として前提している。この前提をどう扱うかによって読者の反応がどう変化するを予想しつつ、ヨハネは *λαλεῖν* をめぐる議論を展開しているのである)。上のよう二文を並記してみれば次のことが窺われる。ヨハネにおいては *Ταῦτα τὰ βῆματα* に含まれた「音」を強調する *λαλεῖν* に関し、*δαιμόνιον* に関係するものと神・イエスに関連するものとの二系統があるとされているのだろうということ、そして、もしそうであるならば、10,21の否定辞 *οὐκ* はイエスの言葉の中の「音」が二系統のうち一方のものである可能性を否定することによって、これが他方に属するものであることを強く肯定する機能を果たしているということ。

⁹ 小論『諸起源』にてわれわれは、〈拡大された語用論〉という視点から分析する。われわれはヨハネ「福音書」の他の新約諸文書への非依存仮説に反対である。これら諸文書の作用影響史は読者の日常の庶民生活において脈打っていて、ヨハネはそれを意識して書き語るし、読者はその枠組みとの関連の中で詩的制作的に読み聞くのだとわれわれは考えるのである。

¹⁰ 惡霊憑き言辞が出る際の話し手聞き手の相互関係、両者の身構えは、次の文に鮮明に浮き出ている。

8:40 ところが、今、あなたたちはわたしを殺すことを求めている、

神から聞いた真理をあなたたちに語ってしまった人間を

8.40 *νῦν δὲ ζητεῖτε με ἀποκτεῖναι*

ἀνθρώπον δις τὴν ἀλήθειαν [ὑμῖν λελάληκα] ἢν μηκονοῖ παρὰ τῷ θεῷ.

8:45 しかしあたしが真理を言うから、君たちは信じない

8:46 君たちのうち誰が証明できるか、わたしにおいて罪について

わたしが真理を言うなら、何故に君たちはわたしを信じないのか

8.45 *ἐγὼ δὲ ὅτι τὴν ἀλήθειαν λέγω, οὐ πιστεύετε μοι.*

8.46 *τίς ἐξ ὑμῶν ἐλέγχει με περὶ ἀμαρτίας;*

εἰ ἀλήθειαν λέγω, διὸ τί ὑμεῖς οὐ πιστεύετε μοι;

8:47 神からである者は神の言葉を聞く。

あなたたちが聞かないのは神からであるのではないからである。」

8.47 ὅτι *ἐκ τοῦ θεοῦ* τὰ *ρῆματα τοῦ θεοῦ* ἀκούει
διὰ τούτο *ἰμεῖς οὐκ ἀκούετε*, ὅτι *ἐκ τοῦ θεοῦ οὐκ ἔστε*.

わたしが真理を言うなら君たちはわたしを信じない、それはなぜか(君たちは既に裁かれている)、と詰問するイエス、ますます激高する「ユダヤ人」たち。イエスは一貫して「神からでない言葉を語るなら死」(申命記18,20; ゼカリア13,3)という神の掟を前に肅然と語っておられるのであるが、彼らはイエスの攻撃的口調が「自分からでなく(i.e. 取りつかれた者のように)」語られることになお一層苛立つ。ここでは真理の内容についての言及は決定的に避けられている。真理とはここでは〈神から〉の関係性そのものであり、真理を聞けない者とは、その存在が〈神から〉の関係性から排除された者のことである。ヨハネにとって真理の意味論は意味素性 semantic feature を捨象した、〈神から〉の関係性の意味論である。だから人間が真理を「聞く」ということは、この人が存在しその数ある器官の一つである聴覚が音を捉える、というのではない。「聞く」とは〈神から〉の音にこの人の存在が同調し共鳴するのである。彼の存在が〈神から〉であり、「同じものが同じものを」であるからである。われわれは、「聞く」ということにおいて「鳴り渡る存在の同型性」、ということを考える。

¹¹ J. Baumgarten は「終わりの日に」の定型表現を7,37を除き全体として「必ず未来的終末論の意味で用い」られているとしたうえで次のように述べている。「ヨハ12:48は…著者によって独特な意味に解釈される。即ち、イエスの言葉が、信仰者が彼の言葉を受け入れるか拒否するかに従って、既に今彼らを終末論的に判定する。この点において、裁きはイエスの言葉において既に先取りされている」『ギリシア語新約聖書釈義事典II』 教文館 98。彼の最後の文は「全体として未来終末論」という自分の主張に合わせるための追加言及であるが、テキストの位置価ともいいうものを考えればこの追加文は撤回されるべきであるように聞こえる。

¹² 他の新約、旧約諸文書についての頻度については Vgl. Sasaki: *Joh 8,52-53 91.*

¹³ 拙論:『セオーレイン』146f.

¹⁴ ibid 147, 167, 159Anm.19.